

防波堤にて

漁船の発動機が鼓動のように海面を叩く
私の隣ですすり泣き、喘ぐ声がする

(私はこの防波堤を歩きたい)

漁船は海を横切ってゆく
うずくまる幼児が海底に涙を沈める

(この海も次第に直線の集合体になるのか)

まだ午前だろうか、それともすぐに夕暮れか
影はどこへ消えたのかわからない

(私の足元は滑りやすく濡れている)

言葉は話されない、ここでも
あるのは形式と映像と、そしてイコライザ

私はこの防波堤を歩く
この幼児とともに

(まだ風はささやきを続けている)

海はもう溶かすものを必要としていない
もう飽いてしまったのだ

せめて欲望なりと生み出されるのであれば
おお、かつては「母」と称えられた海よ

(この児の涙の理由に辿り着きたい)

(2001.9.24)